

## 第3回 小中一貫教育懇話会

- 1 開催日時 平成25年4月24日(水) 19:00~21:10
- 2 開催場所 生駒北小学校多目的室
- 3 テーマ 生駒北小・北中学校における小中一貫校の設置について検討し、懇話会として一定の方向性を出すための会の進め方や取組内容について
- 4 出席者 小柳和喜雄（奈良教育大学教授）、大野誠（生駒北小学校育友会会長）、影林保志（生駒北中学校育友会会長）、森田由紀（打田・高船保護者代表）、藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）、窪田博明（久保自治会顧問）、十文字良明（生駒北小学校長）、本田善藤（生駒北中学校長）、柳田富恵（生駒市校園長会会長）、富山二郎（生駒北小学校教諭）、政岡俊伸（生駒北中学校教諭）

（事務局）峯島教育総務部長、真銅教育総務課長、伊東教育指導課長、吉村教育指導課課長補佐、前田教育指導課指導主事

- 5 開会あいさつ （峯島部長）

- 6 事務局より

○参加者紹介

○懇話会設置の趣旨や運営についての説明

- 7 意見交流

座長：前回の協議内容を受けて事務局から今後の計画を提案していただく。

事務局：「小中一貫教育についてよく分からない」「小柳先生の話を知りたい」という皆様のご意見だったので、5月12日（日）13時半から16時半の日程で講演会と保護者説明会を開く。最初の1時間30分ほど小柳先生にお話をしていただき、その後保護者に焦点を当てた説明会を開く。日曜日の昼が保護者が一番出やすい時間だと伺ったので5月12日に設定した。高山地区では農業をしている方も多いため、この日を逃すと田植えの準備時期と重なる。できればこの日に開催したいと考えているのだがどうか？

平日の夜に保護者説明会を行う日程も組んだ。懇話会資料にある6月7日は小柳先生の都合が悪い。6月3・4・5日ではどうか。

先進校視察は富雄第三小中学校を予定している。遠隔地だと参加者の拘束時間が長い。多くの保護者に参加していただきたいのだが、平日に子どもが授業をしている時間帯に視察するため、大人数で視察するわけにはいかず、視察は懇話会参加者に限定したい。

5月の懇話会は27日、6月は20日の予定である。講演会や先進校視察の後の話し合いなので、今後の方向性を出していく上での進展が見られるのではないかな。

参加者：今回の講演会や説明会にたくさん参加してもらいたいのは保護者である。何年か先に小中一貫校に通わせるかもしれない幼い子どもの保護者、つまり、今の幼稚園や保育園の保護者にも呼びかけた方がいいのではないかな。

参加者：説明会を2回、小柳先生の講演、先進校視察を組んでいただいた。前回の保護者アンケートでは、説明会の開催を求める声が多かった。保護者の声を受け入れたスケジュールなのでこのままで進めてほしい。

参加者：アンケートでは日曜日に説明会をしてほしいという声が多かった。また、最低1ヶ月前には開催の連絡をしてほしいとも言われている。明日にでも保護者全員に一斉メールで連絡をすべきではないかな。

参加者：打田・高船保護者の一部で先日話し合いをした。前回の説明会に参加した保護者からは、打田・高船地区は後回しにされている感じだし、質問等がいいにくいという声があった。説明会の後で打田・高船の保護者説明会を開いてほしい。また、普賢寺小だけに子どもがいる保護者には懇話会だよりが届かないので、普賢寺小学校に懇話会だよりが届くよう、教育委員会から連絡をしてほしい。

事務局：京田辺市の教育委員会と連絡を取って対応したい。

参加者：小さい子どもを持つ人たち、つまり保育園や幼稚園の保護者へはどのように連絡するのか？園からなのか自治会から連絡するのか。先日、北小校区自治会長総会があった。会長全員の総意として、「学校を支えていきたい」ということで一致している。そして、「地域から学校がなくなるのは避けてほしい」というのも全員一致の意見である。

事務局：12日の講演会・保護者説明会については幼・保の保護者を含め、地域全体に案内を配れるようにする。

座長：6月7日は参加できなくなった。3～5日あたりで開催されると私は参加可能である。その点についてご意見いただきたい。

参加者：小柳先生がいらっしゃるほうがいい。視察と重ならない4日か5日がいい。

参加者：会社勤めは月曜が忙しいようなので、3日を避けるといいのでは。

事務局：早く知らせるために一斉メールに6月の保護者会についても入れてもらうといい。だから、日にちについては今日決めたほうがいい。

参加者：5月13日に視察するほうが5月の懇話会にそれを受けての話し合いができる。

座長：確認すると、先進校視察については5月13日午後富雄第三小中学校へ行く。6月5日水曜日に説明会を行う。5月27日は懇話会を開催する。

打田・高船地区への効果的な説明や、幼稚園や保育所の保護者への連絡については事務局で早く考えてもらう。

わたしは講演会でどのような話をすればいいかな？なぜ今「小中一貫教育」と言われているのかをお話できると考えている。小中一貫には背景がある。児童生徒数が減った状態、統廃合での一貫校、小中学校が隣接していることに起因する一貫校、私学中学校に子どもが流れることを避ける方法としての一貫校、9年間の義務教育を考えた上での一貫校、さまざまな背景で生まれた小中一貫教育だから、全ての一貫校をひとくくりには考えられない。一貫校のメリットも放っておけばデメリットになりうるし、その逆でデメリットだったものがメリットになることもある。このことは今までの懇話会で説明した。私は今まで小中一貫教育・一貫校設立に関わる中、設立という意味決定をしたら、次に「小中一貫教育・小中一貫校で何ができるのか」を考えた。その点で私は推進派ととられているよう

だ。しかし、いったん「やる」と決めたらできるだけいいものを子どもたちのために・・・と考えるのは当たり前のことである。私は高山地区とよく似た状況を背景にして生まれた一貫校について紹介するとともに、小中一貫校の実施直後から成熟期に至るまでの「過渡期」と呼ばれる時期に起こる問題について話をしようと思っている。

参加者：根幹は次の世代の子どもたちにどのような力をつけるのか、である。小柳先生の教育学者としてのお考えを話してもらいたい。

座長：これについては、自分の意見と一般論を区別して説明しようと思う。

参加者：小中一貫校は、「先生が新しいことに挑戦する学校」になってほしい。しかし、この試みが5年経ってやっと成功するようではだめだ。どの子どもにとっても一年一年はたった一度きりで大事なものである。だから保護者は心配なのだ。よって、小柳先生には話の中で保護者が疑問や不安に感じている事を説明していただけたら、と思う。

座長：私は全国の小中一貫校設立に長くて9年、短いもので2年関わり、30~40程の実例を見た。それらを皆さんに伝えたい。

参加者：私は中学で理科を教えていた。子どもたちは小学校で何を教えられ、中学校ではそれをもとにどのように指導するのか・・・私は系統的に自分が教える教科を見てきた。中学校では小学校や高校との連携が必要である。連携することでのメリットやデメリットを小柳先生に話していただきたい。

座長：例えば算数や数学の分野において、小学校では仮分数を必ず帯分数になおす。しかし中学では仮分数のまま帯分数になおすことはない。なぜそうするのかを先生が分かっていたら子どもの教育にいいと思う。

参加者：一貫校を実施した学校現場の「こうやっといったらよかった」という声をたくさん知らせていただきたい。また、「子どもにとってこんなことがプラスになった」ということを教えてほしい。

座長：先生が子どもと一緒に何を築いたのかを伝えようと考えている。保護者が不安に思っていることを中心に話をするつもりである。

参加者：前回にアンケート結果を伝えた。児童数減少、学力向上、校舎老朽化対策が今の生駒北中校区が抱える課題である。学力と老朽化については小中一貫校の実施で改善されることが分かる。しかし児童数減少についてはどうか。このことについて説明をしてほしい。

座長：一貫校になったとしても、そのことだけでは児童数は増加しない。生駒北地区の地域おこしについては私はあまり言えない。

参加者：ひかりが丘は住宅地として開発された。今は高齢化が進む。ひかりが丘に魅力的な学校があるかどうかは住宅購入の大きなポイントのひとつだろう。将来この地区を支える子どもがここに来てほしいので、先生にお話をお願いしたい。

参加者：これから10年を見すえ、魅力ある小中一貫校をつくる必要がある。この地域の公教育の復活、先端科学技術大学院大学が近くにあるという環境、長い伝統を持った地域である高山、これらのすばらしい魅力を生かせるようにしてほしい。市で初めての小中一貫校の旗揚げに関わり、行政に「こうしてくれ」と言うよりも、地域と保護者と先生が三位一体になって築き上げないといけない。

座長：児童数が減って学校がなくなると活気がなくなる。小中一貫校は地域の方が集まる場所になる。

参加者：一貫校設置について違和感があるという話を第1回目にした。懇話会は一貫校についての推進協議会ではなかったはずだ。今の北小や北中が抱えている課題を一貫校にすることで解決できるのか。この構想は市長からのトップダウンで降りてきた。小中一貫校を作ることが地域の魅力を高めることにつながるのか？人口の減少を食い止められるのかについて、生駒市長の答えはノー。教育委員会もノー。

幼稚園が廃園になり、北倭保育所といっしょになるというのが一貫校とセットになっている。半年前にその話が持ち上がった。これは教育委員会が独立した立場で考えたことではない。地元の議員さんも知らなかった。高山幼稚園で育った子どもが北小でどう育つのか、その検証がなされないままこの話を進めていっていいのか。高山地区には公立の幼稚園がなくなるが本当にそれでいいのか。一貫校は「高山地区をこのようにしよう」ということから始まったものではない。小中一貫校はまだ十分に成熟してはいない。つまり実験的試みということだ。小中一貫教育に反対の立場で、小柳先生と180°違う意見を持つ人もいる。だから躊躇するのは当たり前だろう。実験として小中一貫校を実施するのではなく、小中一貫教育が熟すまで待ってからでもいいのではないか。

小中一貫に一番かかわるのは幼い子どもがいる若い世代の人たちだから、その人たちを参加者に加えてほしい。

今、生駒北中の生徒はクラス替えがない辛さを味わっている。1クラスでは濃密で硬直した人間関係になるので、2クラス編成にしてほしい。生駒市で1学年1クラスは北中しかない、そのために何とか生駒市が手立てを打つべきではないか。

参加者：私は生駒北小に関わっていた頃から、小中一貫になったらいいと思っていた。知り合いで一貫校に通う子を持つ親は「いいよ、たくさんの先生に育ててもらって自信がついたよ」と言っている。大阪からここに来て感じることは、地域や保護者の力が大きいことだ。地域に力がある。この地区の子どもは高校に行くとカルチャーショックを受けると言われているが、それも成長の過程で大事なことだと感じる。子どもたちは家に帰ると友達の家が遠いので地域で遊ぶことがない。だから人との接し方を学べる小中一貫はいいと思う。老朽化した北小を早く新しい学校にしてほしい。

参加者：小学生の子どもを持ったお母さんが私の知り合いにいる。その人の子どもは北中に行く予定だが、「北中の子どもはのびのびとしていい」と言っている。人間関係がぎすぎすしていない北中の良さを伝えてほしい。また、新しい試みのないところには何も生まれない。挑戦する学校に是非ともしてほしい。先生は守りに入らないで攻めの教育をしてほしい。

座長：北中や北小の子どもたちの課題は何であるのかを先生に聞きたい。子どもたちに何が必要なのか、ということで小中一貫になったところもある。35~37人のクラスを2クラスに分けて少人数指導になったとしても教育方法が変わらないと課題解決にはならない。子どもの課題と小中一貫とが合わないなら、小中一貫はやる意味がない。しかし、小中一貫教育のどの部分がマイナスになるのか、私と180°意見が違うという人に意見を聞きたい。解決に向けての話がしたい。

小中一貫校設立についての手続きの問題と小中一貫校の教育の中身についての問題は切り離して考えなければならない。

参加者：中学校では先生の数が少ないと部活動の指導者がいなかったり教科の専門の先生がいなかったりする。これらは小規模校であるが故の教育条件である。しかし、それらの課題に教育委員会が手を打たないことには解決しない。生徒の切実な願いはクラス替えで、生徒たちはすごく抑制的に生活しているように感じる。小中一貫校になっても教員の数は増えない。一つの敷地に小学校と中学校があるということは、今後子どもの数が増えても、別にすることができないということだ。小学校と中学校の連携の方法には、ひとつの敷地に小学校と中学校を入れるという方法以外に別の方法もある。子どもの教育条件が良くなれば、それでいい。しかし、今の構想では具体的にいいと思えることがない。高山町の住民としても私は賛成できない。

参加者：一貫校が魅力ある学校づくりにつながるかという私には自信がない。北小・北中校区の3つの課題は、児童数減少、学力向上、校舎老朽化である。小中一貫になってもかわらないのは1学年1クラス

だということ。1学年1クラスだと、教員の事務処理量が膨大で、学級会計、対外的な交渉、社会見学の下見などすべて一人で行わなければならない。相談もできない。これらを考えると、一貫校では外枠としての魅力はあるが、中味に魅力があるかという点と正直分らない。だから賛成とか反対とかではなく不安である。

参加者：一貫校になるとシステムが変わる。量ではなく質の変換。学校文化を新しいものにしていくという質の転換である。先生が不安や心配を口にすると保護者はもっと不安になる。学校文化や学校の質を変えていくんだという先生の強い気持ちが欲しい。

参加者：教員の労働環境にかかわる部分は市と詰めていただいて、どのようにバックアップするのか市で提案してもらおう。国内では少子化で1学年1クラスしかない学校もたくさんある。地方の様々な例から学び、どうしていったらいいのかを考えなければならない。1クラスであることをマイナスに考えず、プラスに考えてほしい。

参加者：少人数指導の良さは実感している。しかしそれが小中一貫校設立につながるとは思わない。本当に小中一貫校に良さがあるのかどうか不安だ。当然のことながら、小中一貫になれば教師の意識も変えていく必要があるだろう。

参加者：今最も切実なのは教師が減ることだ。教師が減ると子どもに提供できる教育の質が低下するのではないかと不安である。小中一貫校にすれば中学校の先生が小学校の子どもの様子を見ることができ、多くの先生が子どもに関わることができる。

座長：「小中一貫教育ありき」でする懇話会ではない。現状を見て、何が最適なのか何が有効なのかを講演会で話せたらと考えている。この子たちのために何ができるのか、それが課題であろう。

## 8 事務連絡（事務局）

次回の懇話会は、5月27日(月)19:00~21:00に生駒北小学校で開催予定。

## 9 閉会あいさつ（峯島部長）